

大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ハ兩國及其ノ臣民ニ平和ノ幸福ヲ回復シ且將來紛議ノ端ヲ除シコトヲ欲シ媾和條約ヲ訂結スル為メニ大日本國皇帝陛下ハ山閣總理大臣從二位勲一等伯爵伊藤博文外務大臣從二位勲一等子爵陸奥宗光ヲ大清國皇帝陛下ハ太子太傅文華殿大學士北洋大臣直隸總督一等肅毅伯李鴻章二品頂戴前

出使大臣李經方ヲ各其ノ全權大臣ニ任命
セリ因テ各全權大臣ハ互ニ其ノ委任状ヲ
示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ以テ左ノ諸
條款ヲ協議決定セリ

第一條

清國ハ朝鮮國ノ完全無缺ナル獨立自主ノ
國タルコトヲ確認ス因テ右獨立自主ヲ損
害スヘキ朝鮮國ヨリ清國ニ對スル貢獻典
禮等ハ將來全ク之ヲ廢止スヘシ

第二條

清國ハ左記ノ土地ノ主權並ニ該地方ニ在
ル城壘兵器製造所及官有物ヲ永遠日本國
ニ割與ス

一 左ノ經界内ニ在ル奉天省南部ノ地

鴨綠江口ヨリ該江ヲ溯リ安平河

口ニ至リ該河口ヨリ鳳凰城海城

營口ニ亘リ遼河口ニ至ル折線以

南ノ地併セテ前記ノ各城市ヲ包

含ス而シテ遼河ヲ以テ界トスル
處ハ諛河ノ中央ヲ以テ經界トス
ルコトト知ルヘシ

遼東灣東岸及黃海北岸ニ在テ奉
天省ニ屬スル諸島嶼

二臺灣全島及其ノ附屬諸島嶼

三澎湖列島即英國グリーンウイチ東
經百十九度乃至百二十度及北緯二
十三度乃至二十四度ノ間ニ在ル諸

島嶼

第三條

前條ニ掲載シ附屬地圖ニ示ス所ノ經界線
ハ本約批准交換後直チニ日清兩國ヨリ各
二名以上ノ境界共同劃定委員ヲ任命シ實
地ニ就テ確定スル所アルヘキモノトス而
シテ若本約ニ掲記スル所ノ境界ニシテ地
形上又ハ施政上ノ點ニ付完全ナラサルニ
於テハ該境界劃定委員ハ之ヲ更正スルコ

トニ任スヘシ

談境界劃定委員ハ成ルヘク速ニ其ノ任務ニ從事シ其ノ任命後一箇年以内ニ之ヲ終了スヘシ

但シ談境界劃定委員ニ於テ更定スル所アルニ當リテ其ノ更定シタル所ニ對シ日清兩國政府ニ於テ可認スル迄ハ本約ニ掲記スル所ノ經界線ヲ維持スヘシ

第四條

清國ハ軍費賠償金トシテ庫平銀貳億兩ヲ日本國ニ支拂フヘキコトヲ約ス右金額ハ都合八回ニ分チ初回及次回ニハ每回五十萬兩ヲ支拂フヘシ而シテ初回ノ拂込ハ本約批准交換後六個月以内ニ次回ノ拂込ハ本約批准交換後十二個月以内ニ於テスヘシ殘リノ金額ハ六個年賦ニ分チ其ノ第一次ハ本約批准交換後二個年以内ニ其ノ第二次ハ本約批准交換後三個年以内ニ其ノ

第三次ハ本約批准交換後四個年以内ニ其ノ第四次ハ本約批准交換後五個年以内ニ其ノ第五次ハ本約批准交換後六個年以内ニ其ノ第六次ハ本約批准交換後七個年以内ニ支拂フヘシ又初回拂込ノ期日ヨリ以後未々拂込ヲ了ラサル額ニ對シテハ毎年百分ノ五ノ利子ヲ支拂フヘキモノトス但シ清國ハ何時タリトモ該賠償金ノ全額或ハ其ノ幾分ヲ前以テ一時ニ支拂フコト

ヲ得ヘシ如シ本約批准交換後三個年以内ニ該賠償金ノ總額ヲ皆濟スルトキハ總テ利子ヲ免除スヘシ若夫迄ニ二個年半若ハ更ニ短期ノ利子ヲ拂込ミタルモノアルトキハ之ヲ元金ニ編入スヘシ

第五條

日本國ハ割與セラレタル地方ノ住民ニシテ右割與セラレタル地方ノ外ニ住居セムト欲スル者ハ自由ニ其ノ所有不動産ヲ賣

却シテ退去スルコトヲ得ヘシ其ノ為メ本
約批准交換ノ日ヨリ二個年間ヲ猶豫スヘ
シ但シ右年限ノ滿チタルトキハ未タ該地
方ヲ去ラサル住民ヲ日本國ノ都合ニ因リ
日本國臣民ト視為スコトアルヘシ
日清兩國政府ハ本約批准交換後直チニ各
一名以上ノ委員ヲ臺灣省ヘ派遣シ該省ノ
受渡ヲ為スヘシ而シテ本約批准交換後二
個月以内ニ右受渡ヲ完了スヘシ

第六條

日清兩國間ノ一切ノ條約ハ交戦ノ為メ消
滅シタルハ清國ハ本約批准交換ノ後速ニ
全權委員ヲ任命シ日本國全權委員ト通商
航海條約及陸路交通貿易ニ關スル約定ヲ
締結スヘキコトヲ約ス而シテ現ニ清國ト
歐洲各國トノ間ニ存在スル諸條約章程ヲ
以テ該日清兩國間諸條約ノ基礎ト為スヘ
シ又本約批准交換ノ日ヨリ該諸條約ノ實

施ニ至ル迄ハ清國ハ日本國政府官吏商業
航海陸路交通貿易工業船舶及臣民ニ對シ
總テ最惠國待遇ヲ與フヘシ

清國ハ右ノ外左ノ讓與ヲ為シ而シテ談讓
與ハ本約調印ノ日ヨリ六個月ノ後有效ノ
モノトス

第一清國ニ於テ現ニ各外國ニ向テ開キ
居ル所ノ各市港ノ外ニ日本國臣民
ノ商業住居工業及製造業ノ為メニ

左ノ市港ヲ開クヘシ但シ現ニ清國
ノ開市場開港場ニ行ハル、所ト同
一ノ條件ニ於テ同一ノ特典及便益
ヲ享有スヘキモノトス

一湖北省荊州府沙市

二四川省重慶府

三江蘇省蘇州府

四浙江省杭州府

日本國政府ハ以上列記スル所ノ市

港中何レノ處ニモ領事官ヲ置クノ
權利アルモノトス

第二旅客及貨物運送ノ為メ日本國漁船
ノ航路ヲ左記ノ場所ニ迄擴張スヘ
シ

一揚子江上流湖北省宜昌ヨリ四
川省重慶ニ至ル

二上海ヨリ吳淞江及運河ニ入リ
蘇州杭州ニ至ル

日清兩國ニ於テ新章程ヲ妥定スル
迄ハ前記航路ニ關シ適用シ得ヘキ
限ハ外國船舶清國內地水路航行ニ
關スル現行章程ヲ施行スヘシ

第三日本國臣民カ清國內地ニ於テ貨品
及生産物ヲ購買シ又ハ其ノ輸入シ
タル商品ヲ清國內地ヘ運送スルニ
ハ右購買品又ハ運送品ヲ倉入スル
為メ何等ノ税金取立金ヲモ納ムル

コトナク一時倉庫ヲ借入ルルノ權
利ヲ有スヘシ

第四日本國臣民ハ清國各開市場開港場

ニ於テ自由ニ各種ノ製造業ニ從事
スルコトヲ得ヘク又所定ノ輸入税
ヲ拂フノミニテ自由ニ各種ノ器械
類ヲ清國ヘ輸入スルコトヲ得ヘシ
清國ニ於ケル日本國臣民ノ製造ニ
係ル一切ノ貨品ハ各種ノ内國運送

税内地税賦課金取立金ニ關シ又清
國內地ニ於ケル倉入上ノ便益ニ關
シ日本國臣民カ清國ヘ輸入シタル
商品ト同一ノ取扱ヲ受ケ且同一ノ
特典免除ヲ享有スヘキモノトス

此等ノ讓與ニ關シ更ニ章程ヲ規定スルコ
トヲ要スル場合ニハ之ヲ本條ニ規定スル
所ノ通商航海條約中ニ具載スヘキモノト
ス

第七條

現ニ清國版圖内ニ在ル日本國軍隊ノ撤回
ハ本約批准交換後三個月内ニ於テスヘシ
但シ次條ニ載スル所ノ規定ニ從フヘキモ
ノトス

第八條

清國ハ本約ノ規定ヲ誠實ニ施行スヘキ擔
保トシテ日本國軍隊ノ一時山東省威海衛
ヲ右領スルコトヲ承諾ス而シテ本約ニ規

定シタル軍費賠償金ノ初回次回ノ拂込ヲ
了リ通商航海條約ノ批准交換ヲ了リタル
時ニ當リテ清國政府ニテ右賠償金ノ殘額
ノ元利ニ對シ充分適當ナル取極ヲ立テ清
國海關稅ヲ以テ抵當ト為スコトヲ承諾ス
ルニ於テハ日本國ハ其ノ軍隊ヲ前記ノ場
處ヨリ撤回スヘシ若又之ニ關シ充分適當
ナル取極立タサル場合ニハ該賠償金ノ最
終回ノ拂込ヲ了リタル時ニ非サレハ撤回

セサルヘシ尤通商航海條約ノ批准交換ヲ
了ソタル後ニ非サレハ軍隊ノ撤回ヲ行ハ
サルモノト承知スヘシ

第九條

本約批准交換ノ上ハ直チニ其ノ時現ニ有
ル所ノ俘虜ヲ還附スヘシ而シテ清國ハ日
本國ヨリ斯ク還附セラレタル所ノ俘虜ヲ
虐待若ハ處刑セサルヘキコトヲ約ス

日本國臣民ニシテ軍事上ノ間諜若ハ犯罪

者ト認メラレタルモノハ清國ニ於テ直チ
ニ解放スヘキコトヲ約シ清國ハ又交戰中
日本國軍隊ト種種ノ關係ヲ有シタル清國
臣民ニ對シ如何ナル處刑ヲモ為サス又之
ヲ為サシメサルコトヲ約ス

第十條

本約批准交換ノ日ヨリ攻戰ヲ止息スヘシ

第十一條

本約ハ大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下

下ニ於テ批准セラルヘク而シテ右批准ハ
芝罘ニ於テ明治二十八年五月八日即
光緒二十一年四月十四日ニ交換セラル
ヘシ

右證據トシテ西帝國全權大臣ハ茲ニ記名
調印スルモノナリ

明治二十八年四月十七日即光緒二十一年
三月二十三日下ノ關ニ於テ二通ヲ作ル



大日本帝國全權辦理大臣内閣總理大臣
從二位勳一等伯爵伊藤博文



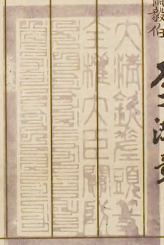
大日本帝國全權辦理大臣外務大臣
從二位勳一等子爵陸奥宗光



大清帝國欽差頭等全權大臣

太子太傅文華殿大學士
大臣直隸總督李鴻章

李鴻章



大清帝國欽差全權大臣二品頂戴副出使大臣 李經方



